

Title	Rulers of the Sea : Naval Commemoration and British Political Culture, c. 1780-1815
Author(s)	中村, 武司
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/49095
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	なかむら たけし 中村 武 司
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 2 1 6 8 3 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	Rulers of the Sea: Naval Commemoration and British Political Culture, c. 1780-1815 (海の統治者—海軍の顕彰とイギリス政治文化、1780-1815 年)
論文審査委員	(主査) 教授 秋田 茂 (副査) 教授 藤川 隆男 教授 竹中 亨 ロンドン大学教授 Penelope J. Corfield

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、18-19 世紀転換期の英国海軍 (the Royal Navy) に対する記念・顕彰行為、海軍の国民的・文化的なシンボルとしての意義を考察した論考である。序と結論を含めて全 8 章から構成され、全文英語 (約 86,000 words、日本語に換算して 400 字原稿用紙で約 700 枚) で執筆されている。

本論文は、大きく分けて、首都ロンドンにおける英国海軍の顕彰行為に関する次の二つの事例を考察の対象としている：(1)政府・議会によるセント・ポール大聖堂での海軍・陸軍顕彰碑・顕彰墓 (パンテオン) の創出 (第 2・3・7 章)；(2)ウェストミンスター選挙区における海軍出身議員の選出という政治的伝統 (第 4・5・6 章)。

第 1 章では、「長い 18 世紀」のイギリスにおける対仏戦争と国家・社会・国民形成との関係をめぐる近年の研究史を批判的考察し、英国海軍の軍事的存在は明らかであるものの、国民意識の形成と海軍との関係を具体的に論じた実証的研究が欠如していることを指摘する。第 2・3 章および 7 章では、前記(1)の事例が考察される。一種の総力戦に発展した対仏・ナポレオン戦争を遂行していくために、当時の英国政府は海軍を政治的に利用した。その典型が、トラファルガー海戦で死亡したネルソン提督を追慕するために举行された 1805-06 年冬の国葬と顕彰行為である。本申請者は、その舞台となったロンドン・シティに位置するセント・ポール大聖堂が、政府と議会によって意図的に海軍関係者を祀る国民的な顕彰墓 (イギリス版のパンテオン) として位置づけられた経緯を、政府・議会文書のみならず同時代の新聞・雑誌の諷刺記事などを広範に参照して明らかにする。関連する第 7 章は、戦後 (1815-50 年) における陸軍を中心とした顕彰行為と比較することで、世紀転換期における海軍顕彰の独自性と特異性を強調している。

第 4-6 章では、前記(2)の事例が考察される。首都ロンドンの最大選挙区ウェストミンスターでは、1780-1818 年の国政選挙 (制限選挙制) において、ほぼ連続して海軍提督経験者が、庶民院議員として選出されていた。その背景には、フランス革命に危機感を抱いた英国統治階級が、海軍の英雄を政治的に利用することで、国民の不满をそらして既存の政治社会体制を温存していこうとした政治戦略があった。本申請者は、特に、当時の政府に対抗して立候補・当選した海軍提督コクリン卿に着目し、「長い 18 世紀」後半の急進主義政治と英国海軍、自由・改革の大義と「古き腐敗」・旧体制擁護のせめぎあいの政治過程を、未公開のマニュスクリプト等を駆使して、詳細に分析している。

第 8 章の結論では、以上二つの事例研究を通じて、世紀転換期の英国において人々の認識・期待感が反映され形づ

くられる媒体として、英国海軍とその英雄が決定的に重要な役割を果たした点を強調し、文化的シンボルとしての海軍の存在を解明している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、フランス革命・ナポレオン戦争期におけるイギリス国民意識（national identity）形成において決定的に重要な役割を演じた英国海軍を、伝統的な軍事史・議会政治史の系譜ではなく、文化史・新たな政治文化（political culture）史の文脈に位置づけ直し、その歴史的意義を問う意欲的な論考である。大英図書館、スコットランド国立文書館、英国紋章院等に所蔵の未刊マニュスクリプトや、同時代の各種新聞・雑誌、大英図書館版画部所蔵の諷刺画など、参照可能な同時代の第一次史料を駆使するとともに、近年作成されたウェストミンスター選挙区の選挙結果データベースも有効に活用し、海軍の政治文化史という新たな研究領域を開拓することに成功している。特に、事例研究アプローチを採用し、顕彰（commemoration）史とロンドン大衆政治史をむすびつけて、伝統的な政治史研究では明らかにできなかった、海洋国家英国における海軍の文化史的意義を解明し、本国史とイギリス帝国史の統合をめざした点は高く評価できる。

もとより、研究課題の設定が大きく、史料的な制約もあるために、例えばウェストミンスター選挙区での選挙における非有権者の動向や意識、首都政治と全国政治との関連性など十分に解明できていない点も残るが、それによって本論文の価値が大きく損なわれるものではない。本論文が英語で執筆されたために、ロンドン大学教授で 18 世紀英国史研究の権威・コーフィールド教授にも審査に加わっていただき、英語論文としても、内容と英文の両面において英国での学位請求論文とも遜色がないことを確認した。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。